

## II 病虫害発生予察事業

### 1. 病虫害発生経過概要及び発生原因解析

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	いもち病 葉いもち	早期：やや遅 普通期：並	早期：並 普通期：やや少	早期では、6月5半旬より発生が見られ、6月下旬の発生は少場率4.4%とやや多の発生であった。その後の進展は少なく全般的には、6月5半旬より発生がみられ、7月下旬の発生は1.6%であったが、全般的にはやや少の発生であった。その進展も少なく、全般的にはやや少の発生であった。	・7～8月の高温乾燥	・育苗箱施肥及び本田期における薬剤散布
	いもち病 穂いもち	早期：やや遅 普通期：やや遅	早期：やや少 普通期：少	早期では、8月上旬より発生がみられ、発生程度はやや少であった。普通期では、9月上旬より発生がみられ、9月下旬の発生は場率6%、平均発病株率は0.2%であり、枝梗いもちの発生が主体であった。全般的には少の発生であった。	・出穂時期の高温	・出穂前の粒剤施肥 ・出穂時に殺虫殺菌混合剤によりカメムシ類等の同時防除
	紋枯病	早期：並 普通期：並	並	早期では6月25日に諫早市で初発を確認。7月下旬の発生は場率は8.9%、平均発病株率は1.3%であった。出穂後の上位葉節へは7月11日に初発を確認。9月下旬の発生は場率は5.9%、平均発病株率は8%と平年並の発生であった。		・穂ばらみ期から出穂期にコブノメイガ、ウンカ類との同時防除
	ばか苗病	並	並	早期では並の発生であった。普通期では育苗期に一部で多発し、本田でも各地で発生が認められたが、全般的には平年並の発生であった。		・種子消毒
	白葉枯病	早期：並 普通期：やや早	やや少	早期では7月11日に勝本町で、普通期では7月25日に佐世保市で初発を確認。その後一部で発生がみられたが全般的にはやや少の発生であった。		・常発地帯の一部で防除が実施された程度
	もみ枯細菌病	並	やや多	早期では局所的に発生がみられた。8月上旬より発生がみられ、一部で多発もみられた。その後の発生は8月下旬2.5%、9月下旬5.6%、平均発病株率は9月下旬3.8%で、全般的にはやや多の発生であった。	・出穂時期の降雨	・穂いもちとの同時防除
	ツグツグ病 萎縮病	並 並	並 やや少	越冬密度は平年並であった。第1世代成虫盛期は6月2半旬、第2世代成虫盛期は7月4半旬であった。発生は、第1世代成虫の保毒率は2.4%であった。萎縮病の発生は少なかった。	・保毒虫率が低かった。	・箱施肥によりいもち病、ウンカ類との同時防除
	ヒメビウコ 縞葉枯病	並 早期：並 普通期：並	並 早期：やや少 普通期：並	ヒメビウコは越冬密度は平年並であったが、第1世代幼虫の発生は、第1世代成虫盛期は6月2半旬、第2世代成虫盛期は7月2半旬であった。縞葉枯病は、第1世代成虫盛期は7月1.9%、第2世代成虫盛期は7月2.9%であった。発生は、第1世代成虫の保毒率は4%、第2世代成虫の保毒率は0.1%以下であった。	・保毒虫率が低かった。	・箱施肥によりいもち病、ウンカ類との同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
(イネ)	ヒメコナ	やや早	やや多	4月22日初飛来、6月8~9日、14~16日、26~28日、7月2~3日、14~15日に飛来がみられた。このうち、6月14~16日、7月2~3日の飛来が多かった。飛来時期はやや早く、全体の飛来量もやや多かった。	・飛来時期やや早く、飛来回数・量ともやや多かった。	・多飛来時の集結産卵期及び幼虫ふ化揃い期の防除・生存期毎の要防除密度の設定が必要
	ヒメコナ	やや早	やや多	セジロウナカとほぼ同時期の飛来であったが、主体は7月2~3日、14~15日であった。飛来量はやや多かった。県平均株当たり寄生頭数は8月下旬3.1頭、9月中旬1.1頭であった。9月上旬に坪枯れが初確認された。なお8月の短翅率は69%と高かった。	・飛来時期やや早く、飛来回数・量ともやや多かった。	・幼虫ふ化揃い期の単独防除及びコブノメイガ等との同時防除
	コブノメイガ	並	並	6月11日に成虫を確認。主な飛来は6月8~10日、7月2~3日にみられた。飛来量は平年並であった。平均被害率は早期では8月上旬1.3%、普通期では8月下旬1.0%、9月下旬1.9%であった。		・第1世代の防除はウナカ類との同時防除。第2世代以降は紋枯病との同時防除
	ヒメコナ	やや早	やや多	越冬密度は全般的にやや多であった。3月下旬には畦畔雑草で取食活動がみられ、早期水稲では田植直後からは場侵入がみられた。5月下旬の県平均発生率は7.9%、株当たり寄生頭数は0.1頭で平年に比べやや多かった。普通期早植地帯での発生量もやや多く、山間地などで被害が目立った。	・暖冬により越冬虫が多かった。	・育苗箱施薬及び本田期における薬剤散布 ・新発生地では初期防除が徹底しなかった。
	ヒメコナ	並	並	全般的に並の発生であったが、早期及び普通期早植地帯の一部に被害がでた。		
	既点米カメムシ類	並	やや多	予備灯の誘殺量が平年に比べやや多く、雑草地での発生量も多かった。全般に早期、普通期とも平年より発生がやや多く、早期では、8月上旬の発生率は3.1%、20回すくい取りの平均値が0.5頭であった。普通期では、8月下旬の発生率は1.1%、20回すくい取りは卵子察ほ場では4.5頭、巡回調査地点での平均値が0.1頭であった。	・暖冬により、越冬虫が多かった。	・出穂以降に殺虫殺菌混合剤により穂いもちとの同時防除 ・周辺雑草地の防除が不徹底
	スミミコナ	やや早	やや多	昨年秋期の発生が多く、また暖冬により越冬生貝も多かった。既発生地域において面積の増加がみられ、やや多の発生であった。3月下旬以降水路での活動が認められ、県央地区では7月上旬の冠水により田植直後の水稲に被害がでた。	・冠水による侵入	・貝・卵塊の捕殺 ・本田期における薬剤散布 ・水田での薬剤防除法は一応確立されているが、実施は少ない。 ・用水路での防除技術の確立が必要である。
ムギ類	さび病類	並	やや多	小麦の赤さび病は、4月下旬から発生、5月下旬には局部的に多発ほ場も見られ、全般的にやや多の発生であった。二条大麦、探麦の小さび病も4月下旬から発生したが、少発生に留まった。その他のさび病類は極めて少ないか、発生を認めなかった。	・耐病性の低い品種の栽培面積が増加した。	・一部地域を除いて防除がほとんどされていない。
	うどんこ病	やや早	やや多	1月下旬から二条大麦と小麦に発生、4月以降特に二条大麦で局地的に多発した。		
	赤かび病	並	並	4月下旬に二条大麦と小麦で初発を確認。その後の発生は緩やかで、大麦、探麦、小麦とも発生率は高かったが発病率は低く、全般に平年並の発生であった。		

風作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ジャガイモ	疫病	春作：やや早 秋作：並	春作：並 やや多 秋作：並 やや多	春作：平均よりやや早く4月中旬に発生を認め、その後徐々に増加し、5月下旬には全般的に発生した。秋作：10月下旬に発生を認め、11月上旬には全般的に発生した。	4月下旬～5月中旬の降雨 11月の気温が平年より高く、発生に好適であった。	4月中旬以降3～4回の薬剤散布 10月下旬以降2～3回の薬剤散布
	77ラミ類	春作：並 秋作：並	春作：並 やや多 秋作：並	春作：3月から4月にかけて発生が増加し、5月下旬には全般的に発生した。秋作：10月下旬に発生を認め、11月上旬には全般的に発生した。	11月の気温が平年より高く、増殖に好適であった。	アブラムシの種類別に防除効果の異なる薬剤があり、使用薬剤の選択に注意
	シヨウネンシテウ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：4月下旬、発生は増加し一部多発園場も見られたが、5月下旬の発生は全般的に減少した。秋作：全般的に発生し、平均寄生株率は10月上旬0.9%であった。		77ラミ類との同時防除
	食葉性ヤコ類	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：多	春作：ヨトウムシ類による食害が見られたが全般的に平年並の発生であった。5月下旬の平均被害株率は3%であった。秋作：ハスモンヨトウは発生が多かった。平均寄生株率は10月上旬9%、10月下旬5%、11月上旬1%と高く、全般的に多発生であった。シロイチモシヨトウは発生地域が前年より拡大し、県下の主産地で発生した。	7～8月が高湿少雨であったため増殖に好適であった。	秋作では多発生であったため散布回数が多かった。 77ラミ類との同時防除
	ジャガ代カ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：全般的に平年並の発生であった。4月下旬の平均被害株率は1.8%であった。秋作：平均寄生株率は9月下旬0.1%、10月下旬0.6%、11月下旬0%で、全般的に平年並の発生であった。		77ラミ類との同時防除
ダイズ	紫斑病	並	並	各地で発生がみられ、紫斑粒率も平年並であった。		
	べと病	並	並	8月23日、森山町で発生を確認、その後各地で発生し、8月下旬の発生率は35%、平均発病株率は22%で、平年並の発生であった。		
	葉焼病	並	並	8月7日三井楽町で発生を確認、その後各地で発生した。9月上旬の発生率は25%、平均発病株率は5%で、全般的には平年並の発生であった。		
	ハスモンヨトウ	やや早	多	7月23日県予察ほ場等で発生がみられ、発生率は7月下旬で38%、8月下旬65%、9月下旬100%であった。発生量は多く、9月中旬には全葉の50%以上白変化したほ場も見られた。	7～9月高温少雨が増殖に好適であった。	8月中旬より防除が行われたが、多発生のため防除回数は多かった。
	97A類	並	やや少	各地で発生がみられたが、平年よりやや少なかった。		
	カミシ類	並	やや多	8月下旬以降各地で発生が認められ、県予察ほ場ではやや多の発生量であったが、一般ほ場ではハスモンヨトウの防除により併殺された。		ハスモンヨトウとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発 生 経 過 の 概 要	発 生 原 因 の 解 析	防 除 の 概 要
カンキツ	そうか病	早	並	春葉での初発は、4月13日に大村市で認め、平年に比べ早かった。5月上旬に比ベ果実では6月上旬より平均発生を認め、その後、果実一部で多発したが、全般的には平年並の発生であった。	・5月上旬の降雨	
	かしよう病	早	並	越冬病斑は平年より少なかった。春葉での初発は平年に比べ早く、4月9日に大村市で認め、発生は5月上旬以降増加し、6月下旬に平均病率0.2%程度で推移した。果実では、6月下旬より平均病率0.1%程度で推移した。その後は、葉、果実ともに平年並の発生であった。		
	黒点病	並	並	春期の枯れ枝の発生量は平年に比べやや少なかった。果実での発病は7月上旬から増加したが、10月下旬の発病率は4.6%と平年並であった。		
	ヤノシロシ	並	並	1齢幼虫の初発時期は、第1世代が5月中旬、第2世代は7月下旬でともに平年並であった。全般的に発生量は平年並であった。		
	ミミクシ	並	やや多	春先の発生は平年に比べやや多かった。5月下旬以降増加し、6月下旬には平均寄生率は2.7%に達した。その後、7月から8月には盛夏期にもかかわらず高密度に推移したが9月上旬の平均寄生率は1.3%に減少した。一部多発箇所もみられ、全般的には平年に比べやや多であった。		・発生初期防除の不徹底 ・薬剤感受性の低下
	ミミクシ類	並	やや多	チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシが主体であった。春先の越冬虫は平年に比べ多かった。予察灯の誘殺量も平年に比べ多く、8月下旬以降果樹園への飛来が認められ、極早生温州を中心に被害がみられた。	・前年秋の発生が多く、越冬のため越冬虫が多かった。	・ミミクシ類の発生が各地で認められ有機剤の防除効果が低い。
	ヤノシロシ	並	並	越冬世代～第1世代成虫発生量は平年に比べやや多かったが、第3世代以降の成虫発生量は平年並であった。被害果は6月下旬より認められ、8月上旬以降増加したが平年並の発生であった。		
	ワタアブラムシ類	並	やや多	春先より高接ぎ園、幼木園等で発生が多かった。その後も増加し、全般的には平年比ベ多かった。ユキヤナギアブラムシが主体であったが本年は特にワタアブラムシの発生も目立った。		・各地で合成ピレスロイド剤の効力低下が見られた。
ビワ	がんしゅ病	やや早	やや少	春葉における初発は3月上旬で平年に比べやや早かったがその後の発生量は平年並であった。夏葉における発生は夏季の乾燥のため、平年に比べ少なかった。		・登録薬剤が少ない。
	灰斑病	並	やや多	春葉に発生が多く、一部のは場で落葉した。		
	こま色斑点病	並	やや少	春葉における初発は3月下旬と平年並で、その後の発生量は平年並であった。夏葉における発生は、夏季の乾燥のため、平年に比べやや少なかった。		
	ワタアブラムシ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ナシ	黒斑病	並	並	初発は4月23日で平年並であった。発生量は葉、果実とも平年並であった。		
	黒星病	並	少	初発は5月2日で平年並であった。発生量は葉、果実とも平年に比べ少なかった。		
	赤星病	並	並	初発は4月10日で平年並であった。発生量は葉、果実とも平年並であったが一部多発ほ場がみられた。		
	うどんこ病	並	やや多	6月上旬より発生がみられ、8月下旬以降多発ほ場が散見された。	・夏期の高温乾燥	
	ハダシツクイ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		
	ハダニ類	並	やや多	梅雨明け後、密度上昇がみられ、その後の発生も全般にやや多かった。7月に一部の地域で幸水と新水でカンザワハダニの被害と乾燥による葉枯症が発生した		・初期防除の不徹底 ・現行薬剤の効果不十分
	カメムシ類	並	やや多	幼果期及び成熟期に一部被害がみられた。越冬成虫量及びその後の発生量も多く、被害量はやや多かった。	・越冬成虫量が多かった。	
	アブラムシ類	並	やや多	ワタアブラムシの発生が主であり、発生量はやや多かった。		
ブドウ	黒とう病	やや早	やや多	初発は4月20日で平年よりやや早く、5月上旬の降雨により発生が増加し一部多発ほ場も認められ、全般に発生はやや多かった。	・5月上旬の降雨	
	うどんこ病	並	やや多	8月下旬以降やや多発した。	・夏期の高温乾燥	
	ブドウハダシツクイ	並	並	常発園で発生し、8～9月に成虫の羽化が見られた		
チャ	炭そ病	並	やや少	梅雨期後半及び秋季に山間部を中心に発生したが、発生量はやや少なかった。		
	チャノコハダシツクイ	やや早	多	発生量は各世代とも平年より多かった。	・越冬により越冬幼虫量が多かった。	・成虫発蛾ピークの期間が長く防除回数が増加した
	チャノコ	並	並	一番茶末期及び秋芽に一部被害葉の目立つほ場が認められたが、全般には発生量は平年並であった。		
	チャノミハダシツクイ	並	やや多	8月以降発生が多くなり多発ほ場が散見され、全般にも発生量はやや多かった。		
	チャノキハダシツクイ	並	並	平年並の発生であった。		
	カサハダシツクイ	並	並	一番茶期及び二番茶期に多発したが、その後の発生は平年並であった。		
	カサハダシツクイ	並	やや多	高温乾燥のため特に第3世代の発生量が多く、被害量も多かった。	・夏期の高温乾燥	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬春トマト (平成元年 植付)	疫病	並	やや少	1~4月上旬にかけて一部圃場で発生は認められたが、全般にはやや少の発生であった。		・初期防除の徹底
	灰色かび病	並	並	平均発病率は2月下旬0.7%、4月下旬0.6%で平年並の発生であった。		・高剤耐性菌対策のため高剤の輪播散布 ・被害果、花弁の除去
	類かび病	並	やや多	植付以降発生がみられ、一部に多発圃場もあり、やや多の発生であった。平均発病率は11月下旬20%、12月下旬13%、1月下旬6%で経過した。		・発生が多いため高剤散布回数も多い。
	アブラムシ類	並	並	一部に発生がみられ、平年並の発生であった。平均寄生率は11月下旬0.3%、12月下旬0.4%であった。		
	アザミヤカシ	並	やや多	生育期を過ぎて発生し、一部に多発圃場もあり、やや多の発生であった。平均寄生率は生育後期の5月下旬には30%に達した。		・発生が多いため高剤散布回数も多い。
冬春トマト (平成2年 植付)	疫病	早	並	12月に果頂部に発生を認めた(前年発生を認めていない)。		
	灰色かび病	並	並	11月下旬の巡回調査の結果、一部の圃場に発生を認めた(前年発生を認めていない)。		
	アブラムシ類	並	並	11月下旬の巡回調査の結果、一部の圃場に発生を認めた。		
	アザミヤカシ	並	やや少	〃		
冬春キュウリ (平成元年 植付)	べと病	並	やや多	12~1月と5月に発生が目立ち、やや多の発生であった。平均発病率は1月下旬18%、5月下旬37%と高かった。	・1~2月の天候不順	・発生が多いため高剤散布回数も多い。
	うどんこ病	並	並	11月下旬の平均発病率は8%と高かったが、その後は減少した。生育後期に再び増加したが全般には平年並の発生であった。		
	灰色かび病	並	並	11月以降発生がみられ、1~3月に増加し3月下旬の平均発病率は3.5%とやや高かったが、全般には平年並であった。	・1~2月の天候不順	・高剤耐性菌対策のため高剤の輪播散布 ・被害果の除去
	団核病	並	並	12月以降発生がみられたが、平均発病率は0.2~1%の範囲で推移し、平年並の発生であった。		・被害果の除去
	アブラムシ類	並	並	3月下旬にやや多発し、平均寄生率が5.6%となったが、全般には2%以下で経過し平年並の発生であった。		
	アザミヤカシ	並	やや少	3月下旬に平均寄生率が10%とやや高くなったが、全般にはやや少で経過した。		・定植時の殺菌剤施用 ・初期防除
冬春キュウリ (平成2年 植付)	べと病	並	並	全般に平年並の発生である。平均発病率は11月下旬1.4%(前年9%)、12月下旬1.5%(前年12%)である。	・11月の少雨。	
	うどんこ病	並	やや多	発生はやや多く、平均発病率は11月下旬4.3%(前年6%)、12月下旬2%(前年0%)である。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬巻キュウリ (平成2年 植付)	灰色かび病		未発生	12月下旬の巡回調査の結果、発生は認められなかった (前年 発病果率0.5%)。		
	団核病	並	並	一部に発生がみられた。平均発病果率は12月下旬0.08% (前年1%)。		
	アブラムシ類	並	並	12月下旬の平均寄生率率は0.4% (前年1%)と平年並の発生である。		
	ミズキイロアザミ	並	やや少	12月下旬の平均寄生率率は5.3% (前年3.5%)とやや少の発生である。		
	オシロイバナ	並	やや少	12月下旬の平均寄生率率は0.08% (前年1%)とやや少の発生である。		
メロン	モザイク病	並	やや多	CMV-ラゲナリア系によるモザイク病が6月中旬以降各地で発生し一部で多発園場もみられた。全般的にはやや多の発生であった。	・アブラムシ類の発生が多かった。	
	べと病	並	やや多	5月下旬の平均発病率率は15%と高く、やや多の発生であった。		・初期防除の徹底 ・生育後半に発生が多かったため防除が急中した。
	うどんこ病	並	やや多	5月下旬以降発生は増加し、平均発病率率は6月上旬7%、下旬28%と高くやや多の発生であった。		
	黒点根腐病	並	多	9月以降発生が目立ち、一部多発園場もみられた。	・生育期の高温	
	アブラムシ類	並	やや多	5月下旬以降発生は増加し、6月上旬には平均寄生率率は18%に達した。全般にやや多の発生であった。		・生育後半に発生が多かったため防除が急中した。
ミズキイロアザミ	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		・初期防除の徹底	
スイカ	つる枯病	並	やや少	全般にやや少の発生で経過した。		・初期防除の徹底
	炭そ病	並	やや少	全般にやや少の発生で経過した。		
	ハダニ類	並	並	一部多発園場もみられたが、全般に平年並の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	5月下旬から6月上旬にかけて、一部に多発園場もみられたが、全般には平年並の発生であった。		
巻ハクサイ	根こぶ病	並	やや多	前年よりやや増加した。		・定植時の土壌処理
	コナガ	並	並	前年より少なく平年並の発生であった。		
秋冬ハクサイ (平成元年 播種)	軟腐病	並	並	1~2月の平均発病率率は2%とやや高かったが、全般的には平年並の発生であった。	・1~2月の天候不順	・軟腐病に対する慣行薬剤の効力不足
	白斑病	やや早	やや多	10月以降発生は増加し、12月には多発園場もあり、平均発病率率は12月下旬41%と高く、やや多の発生であった。		
	べと病	並	並	10月下旬に一部に多発園場もあり、平均発病率率は8%とやや高かったが、その後の発生は少なく、平年並の発生であった。		
	黒斑病	並	並	10~12月に発生がみられたが、平年並の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
秋冬ハクサイ (平成元年 播種)	アブラムシ類	並	並	平均寄生株率は10月下旬に28%と高かったが、その後11月下旬7%、12月下旬7%と低下し平年並の発生となった。	・10～11月の乾燥	・1か'との同時防除
	コナガ	並	並	10月上旬と12月下旬に増加したが、全般には平年並の発生であった。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪替散布
	ヨトウムシ類	並	並	10～11月前半に発生がみられ平年並であった。10月下旬の平均寄生株率は0.3%であった。		
秋冬ハクサイ (平成2年 播種)	軟腐病	並	並	収穫期に入ったハクサイに発生がみられ、一部に多発園場もあるが、全般に平年並の発生である。平均発病株率は11月下旬2.5%、12月下旬0.9%である。		
	白腐病	並	並	10月以降発生し、11、12月には多発園場も見られるが、全般には平年並の発生である。平均発病株率は9月下旬0%、10月下旬9%、11月下旬8%、12月下旬18%である。		
	アブラムシ類	並	並	9月以降発生し、11、12月には多発園場もみられるが、全般には平年並の発生である。平均寄生株率は9月下旬0.5%、10月下旬4.4%、11月下旬9.8%、12月下旬18%である。		
	コナガ	並	やや多	発生はやや多く、平均寄生株率は9月下旬11%、10月下旬2.2%、11月下旬15%、12月下旬31%とやや高い。		・発生が多いため薬剤散布回数も多い。
	ハスモンヨトウ	並	やや多	全般に発生はやや多く、10月の発生が目立った。		・発生が多いため薬剤散布回数も多い。
冬キャベツ (平成元年 植付)	黒腐病	並	並	10月下旬にやや増加したが、全般には平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	菌核病	並	並	2月下旬の平均発病株率は1.7%で平年並の発生であった。		
	黒斑病	並	並	一部に発生がみられたが、平年並の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	10～12月の平均寄生株率は10%前後で推移しやや多かったが、その後2%前後に低下し平年並の発生となった。	・10～11月の乾燥	・コナガとの同時防除
	コナガ	並	並	10月下旬～12月下旬にやや多発したが、気温の低下とともに減少し、平年並の発生となった。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪替散布
	モンシロチョウ	並	並	平均寄生株率は1%前後で推移し、全般に平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
冬キャベツ (平成2年 植付)	黒腐病	並	並	一部に多発園場がみられるが、平年並の発生である。11月下旬の平均発病株率は4%である。		
	菌核病	並	並	12月下旬の平均発病株率は0.9%で平年並の発生である。		
	アブラムシ類	並	並	12月下旬の平均寄生株率は3.2%で平年並の発生である。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	やや多	発生はやや多く、平均寄生株率は9月下旬21%、10月下旬13%、11月下旬29%、12月下旬27%とやや高い。	・11月の気温が平年より高く、増殖に好適であった。	・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪替散布 ・発生が多いため薬剤散布回数も多い。



農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬キャベツ (平成2年植付)	モンシロチョウ	並	並	全般に平年並の発生である。平均寄生株率は9月下旬1%, 10月下旬0%, 11月下旬0%, 12月下旬0%である。		・コナガとの同時防除
タマネギ (平成元年植付)	白色疫病	並	並	2月下旬には県下の発生圃場率69%、平均発病株率15%と多発生であったが、その後の遡戻は少なく、全般には平年並の発生であった。	・1~2月の天候不順	・初期防除の徹底
	べと病	並	並	3月以降発生がみられ、5月上旬にやや増加したが、全般には平年並の発生であった。		
	ネギアザミウマ	並	並	4月以降発生がみられ、5月下旬の平均発病株率は70%とやや高く、発病程度も高かった。		
	ネギアザミウマ	並	並	全般に平年並の発生であった。発生は12月からみられ、その後増加し5月上旬には平均寄生株率が29%に達した。		
タマネギ (平成2年植付)	白色疫病		未発生	12月下旬の巡回調査の結果、発生は認められなかった (前年発生を認めていない)。		
	べと病		未発生	〃		
冬ニンジン (平成元年播種)	黒腐病	やや早	やや多	8月以降各地に発生し、一部に多発圃場がみられ、やや多の発生であった。10月上旬に平均発病株率は46%に達したが、その後の遡戻は少なかった。発病程度は低かった。	・9月の風雨	・発生が多いため薬剤散布回数も多い。
	うどんこ病	並	やや多	10月中旬から各地に発生し、一部に多発圃場がみられ、11月上旬に発生圃場率は64%、平均発病株率26%とやや多の発生であった。	・10~11月の乾燥	・発生が多いため薬剤散布回数も多い。
冬ニンジン (平成2年播種)	黒腐病	並	並	9月以降各地に発生し、一部に多発圃場がみられたが、全般には平年並の発生である。平均発病株率は11月下旬12%である。		
	うどんこ病	並	並	10月下旬に発生した。11月上旬の平均発病株率は6%、下旬は11%、12月下旬34%で一部に多発圃場がみられるが、全般には平年並の発生である。		
冬レタス (平成元年植付)	灰色かび病	やや早	並	10月から発生がみられ、全般に平年並の発生であった。		
	団核病	並	並	平年並の発生であった。		
	斑点細菌病	並	並	11月下旬に平均発病株率9%とやや高かったが、全般には平年並の発生であった。		
冬レタス (平成2年植付)	団核病	並	やや少	12月下旬の巡回調査の結果、発生は認められなかった (前年発生圃場率20%、発病株率0.4%)。		
	斑点細菌病	並	やや少	12月下旬の巡回調査の結果、発生は認められなかった (前年発生圃場率10%、発病株率6%)。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イチゴ (平成元年 植付)	灰色かび病	並	並	平均発病率は3月下旬まで1%以下で経過し、平年並の発生であった。	・1～2月の天候不順	・高剤耐性菌対策として高剤の輪播散布
	うどんこ病	並	並	育苗期から発生はやや多く、植付後の発生もやや多かった。果実での発生は1%以下で推移し、全般に並の発生であった。	・育苗期の多発生 ・10～11月の乾燥 ・主要栽培品種のうどんこ病り病性がやや高い。	・EBI剤の使用頻度が高い。
	アブラムシ類	並	やや多	10～11月の平均寄生株率は10%以上で、12月下旬には4%と低下したが全般にやや多の発生であった。		・高剤の防除効果の低下した地域が見られる。 ・有効な登録薬剤が少ない ・ミツバチ導入時期の害虫防除が困難である。
	ハダニ類	並	並	本園植え付け後低率で推移し、2月下旬からやや増加したが、全般に平年並の発生であった。		・アブラムシとアゼンボウには有効な登録薬剤が少ない。
	ハスモンヨトウ	並	並	発生は8～10月にやや目立ったが、その後は減少した。全般に平年並の発生であった。		・有効な登録薬剤が少ない ・ミツバチ導入時期の害虫防除が困難である。
イチゴ (平成2年 植付)	灰色かび病	並	並	12月下旬の巡回調査の結果、平均発病率は0.01%以下(前年0.03%)である。		・高剤耐性菌対策として高剤の輪播散布
	うどんこ病	やや遅	並	育苗期の平均発病率は7月下旬4%、8月下旬0.1%と平年並であった。定植後の発生はやや少なかったが、12月は平均発病率0.1%と平年並である。		・EBI剤が適用される傾向にある。
	アブラムシ類	並	やや多	平均寄生株率は9月上旬0.4%、10月上旬0.3%、11月上旬14%、11月下旬0.04%、12月下旬11%で、全般にはやや多の発生である。		・高剤による防除効果が低下した地域がみられる。
	ハダニ類	並	並	12月下旬の巡回調査の結果、平均寄生株率は1%(前年2.3%)と平年並の発生である。		
	ハスモンヨトウ	やや早	多	育苗期から発生がみられ、8月以降多くなった。定植後も発生は多く、発生圃場率は9月下旬35%、10月下旬42%、平均被害株率は9月下旬21%、10月下旬29%と全般に多発生である。	・7～8月が高温少雨であったため増殖に好適であった。	・アゼンボウに登録のある薬剤が少なく、またミツバチ導入時期の防除が困難である。
ショウガ	モザイク病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	白星病	並	並	全般には平年並の発生であった。		
	紋枯病	並	並	〃		
	根茎腐敗病	並	並	〃		
	メイガ類	やや早	やや多	7月以降発生が目立ち、一部に多発圃場も見られ、やや多の発生である。		
	ハスモンヨトウ	やや早	やや多	7月以降発生がみられ、その後増加した。特に9月以降発生が目立った。平均被害株率は8月下旬14%、9月下旬25%、10月下旬56%と高かった。	・7～8月が高温少雨であったため増殖に好適であった。	・ショウガのアゼンボウに登録薬剤がなく他の害虫との併殺防除が実施された。